

10. 怪談の名人

普通の人であれば落語^{らくご}と聞くと楽しい話、愉快な話^{ゆかい}と思うだろう。しかし、落語^{らくご}には滑稽^{こっけい}面白い^{ばなし}話だけでなく、人情^{にんじょう}噺^{ばなし}(人の気持ちや他人への思いやりについての物語)とか怪談^{かいだん}噺^{ばなし}(怖い物語)といった噺^{ばなし}とかも知ることを皆さんはご存じだろうか。

落語^{らくご}の始まりは江戸時代のはじめ頃とされていて、街角^{まちかど}や小さな部屋で人々を集めて、面白おかしい噺^{ばなし}を聞かせたところから始まった。落語^{らくご}を話す人も、はじめは落語を話すことを仕事としていたわけではなく、お坊さん^{ぼうさん}や武士^{ぶし}などが本業であった。噺^{ばなし}の最後に落ち(さげとも言われて、噺^{ばなし}の面白い結末など)がくるところから、「落とし噺^{ばなし}」それが短くなって、落語^{らくご}となった。江戸の中頃をすぎると寄席^{よせ}と呼ばれる落語^{らくご}を観客^{かんきゃく}に見せる場所が作られ、職業落語家^{しよくぎょうらくごか}が現れるようになる。現在の落語^{らくご}は高座^{こうざ}と呼ばれる舞台に座って一人で、扇子^{せんす}と手拭^{てぬぐ}いだけを使って噺^{ばなし}をする形式が多いが、この頃の落語^{らくご}は鳴り物^{たいこ}(太鼓や三味線^{しゃみせん})を鳴らしたり人形^{にんぎょう}を使ったりした落語^{らくご}が人気を集めていたようだ。また、面白い噺^{ばなし}だけだった落語^{らくご}に人情^{にんじょう}噺^{ばなし}や怪談^{かいだん}噺^{ばなし}が取り入れられるようになり、一般大衆の娯楽として広がった。

怪談^{かいだん}噺^{ばなし}の名人と呼ばれた人が、江戸時代末期から明治時代にかけて活躍^{かつやく}した初代三遊亭圓朝^{しょだいさんゆうていえんちょう}である。圓朝^{えんちょう}の父親も落語家^{らくごか}であり、父親の影響もあって7歳の時には寄席^{こうざ}の高座^{らくご}で落語^{らくご}を披露^{ひろ}したという。圓朝^{えんちょう}は次第にその実力を現すようになるが、ある時、師匠^{えんしょう}の圓生^{えんちよう}に圓朝^{えんちょう}が演じようとしていた演目を先に演じられてしまい、演じる演目がなくなってしまうという出来事が起きた。なぜ圓生^{えんしょう}が圓朝^{えんちよう}の演目^{えんもく}を演じたかは定かでないが、圓朝^{えんちょう}はこれをきっかけに、自作の落語^{らくご}、つまり新作落語^{しんさくらくご}を創作^{そうさく}するようになる。

圓朝^{えんちょう}が創作^{そうさく}した落語^{らくご}には「牡丹灯籠」などの怪談噺^{かいだんばなし}や「文七元結」などの人情噺^{にんじょうばなし}があるが、それに加え圓朝^{えんちょう}は外国のものを翻案^{ほんあん}して落語^{らくご}を作ったりもした。有名な作品の中に「死神」という作品があるが、これはグリム童話の「死神の名付け親^{しにがみ なづ おや}」または歌劇^{かげき}「クリスピーノと死神」をもとにしていると考えられている。

このように圓朝^{えんちょう}は、落語^{らくご}の世界においては別格と言われるくらいの落語家^{らくごか}であった。しかし、落語の世界では弟子が名前を代々継いでいくのが普通のはずなのに、圓朝^{えんちょう}の名前は残念^{ざんねん}ながら継がれていない。今後、圓朝^{えんちょう}という名前を復活^{ふっかつ}する落語家^{らくごか}が出てくるのだろうか。

単語リスト：

落語（らくご）	Hài độc thoại	三味線（しゃみせん）	Đàn Shamisen
愉快（ゆかい）	Hài hước	大衆（たいしゅう）	Đại chúng
街角（まちかど）	Góc đường	師匠（ししょう）	Bậc thầy, sư phụ
扇子（せんす）	Quạt giấy	披露（ひろう）	Công khai, phô diễn
寄席（よせ）	Một loại sân khấu kịch nói của Nhật Bản	演目（えんもく）	Danh sách tiết mục
高座（こうざ）	Bục (chỗ đc kê cao lên)	創作（そうさく）	Sáng tạo
太鼓（たいこ）	Cái trống	復活（ふっかつ）	Hồi sinh, phục hồi